

令和元年度 奈良市立平城こども園 研究実践概要

園長名 森口 千鶴代
全園児数 146名

1、研究主題

「豊かな心をもち、いきいきと遊ぶ子どもの育成」
—心が動く環境構成の工夫と援助の在り方—

2、研究年度 2年度

3、研究主題設定理由

本園は、こども園へ移行して2年目である。昨年度の取り組みから、3歳児保育や長時間保育が始まったことで職員間の連携を密にし、保育を進めていくことの大切さをより実感した。今年度も、職員間でのカンファレンスをもち、子ども達がいきいきと心を動かしながら活動したり、異年齢とのかかわりを深めたりできるよう、発達に応じた環境構成や援助の在り方を探っていきたい。

4、具体的な研究内容

①研究のねらい

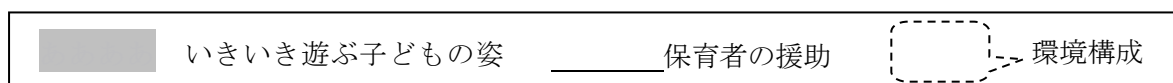
職員間での日々の保育の反省、情報交換や園内研修を通じて、年齢毎の発達の姿に応じた環境構成、援助の在り方を探る。

②研究の重点

- 職員全体でバンビーノ・プラン平成30年度改訂版に対する理解を深め、3歳児・4歳児・5歳児の保育計画を作成し、実践を図る。
- 「いきいき」とは子どもがやりたいことに夢中に取り組んでいる姿と捉え、どのような場面で、いきいきしているのかを職員間で共通理解し、次の環境構成や援助の仕方に繋げていく。
- 園、家庭、地域が連携して、子どもにとって豊かな体験ができるようにする。

③活動の方法

子どもがいきいき遊んだり活動したりしている姿や、その時の環境構成や援助を、事例を挙げて職員間で話し合いの場をもった。



【事例1】 《安心できる人やものとのかかわりを通して生活の仕方を知る時期》

3歳児 5月～6月 「パンツでいく！」

ねらい ○ 保育者に親しみをもち、園生活を安心して過ごす。

5月、クラスの半分以上がオムツである中、園で失敗したくない気持ちから再びオムツで過ごすA児の姿があった。保育者は無理強いすることなく成功した時に、認め言葉をかけ、自信につながるようかかわってきた。

5月下旬、クラスの友達が可愛いパンツをはいて嬉しそうに保育者に見せる姿から、家で「〇〇ちゃんのパンツ可愛かった」と保護者に話していたことを聞き、A児の好きなキャラクターのパンツを用意してもらった。6月には「パンツで行く」とA児から嬉しそうに保護者に話し、登園してくる姿があった。保育者は「かわいいね」など具体的に言葉で表わすことによってより嬉しさが味わえるようにした。また「失敗してもいいんだよ」「濡れても着替えたら大丈夫だよ」とA児の気持ちに寄り添いながら温かいかかわりを続けてきた。次第に失敗しても不安がる様子も減り、6月下旬にはパンツで過ごせるようになった。そのことが自信となり、A児の笑顔が増え、自ら話す姿も多く見られるようになってきた。

A児とのかかわりを意図的にもつ。

保育者も一緒にトイレの中に入り安心できるような言葉を掛ける。

成功したときにタッチするなどスキンシップをとる。



(反省・評価)

- ・ 友達のはいていたパンツに興味をもったことをきっかけに保育者と保護者が連携し、好きなキャラクターのパンツを用意してもらったことで、オムツからパンツになり自信へと繋がった。
- ・ 基本的な生活習慣の確立に個人差があるため、一人一人に応じた援助を行ってきた。そのことによって子ども達は保育者と一緒に生活の仕方を知り、身の回りのことを自分でできるようになり、安心して生活する姿へと繋がった。

【事例2】《身近な環境にかかわり、友達と一緒に遊ぶことが楽しい時期》

4歳児 6月 「みんなで流そうキラキラそうめん」

ねらい ○ 保育者や友達に思ったことや感じたことを話して遊ぶ。

砂場に勢いよく繰り返し水を流したり、トイやビールケースを組み合わせて水遊びを楽しんでいる。

ビールケースやトイを持って来て「こうかな?」「どうしたらいいかな?」と並べたり積んだりしている。「どうやって使ったらいいかな?」と試したり考えたりできるように声をかけ、友達と試している姿を見守る。何度も繰り返し遊ぶ中でトイの使い方を発見した。「こうしたらどうかな?」とビールケースの穴に突き刺し立てかける。それを見た友達が集まってきて、「坂みたいになったよ」「ほんとだね」と話し流し始めた。しばらく流して遊んでいると、「見て。水がキラキラしているよ」と気付いた。保育者は、「どうしてかな?」と投げかけた。「あっ!分かった」「おひさまが当たっているからと違う?」と言う。「ホントや!太陽が出てる」「暑いもんな」「だからキラキラしているのか」と顔を見合わせて嬉しそうに話している。「ほんとだね。今日は天気良くておひさまが出てお水もキラキラしているのかもしれないね」と話し、再び遊びだした。

「キラキラそうめんにしよう」と言った幼児の言葉に「いいね!」と受けとめ一緒に流して遊び「明日もしよう」と楽しんでいた。

水遊びが楽しめるようにいくつかのタライに水をため、トイやビールケースなど目のつく所に用意しておく。

保育者も一緒に遊びながら友達同士でかかわれるように声を掛ける。

子どもの気付きを周りの友達に知らせる。

十分に遊べるように場や時間の確保をする。



(反省・評価)

- ・ どこに水を流せば水がたまるか考えたり、勢いよく水を流すためにトイやビールケースの組み合わせ方を試したりして繰り返し水を流して遊ぶことができた。
- ・ 保育者も一緒に遊ぶことで自分の思ったことや気づきを言葉で伝え合いながら遊ぶ姿に繋がった。

【事例3】《自ら環境にかかわろうとする時期》

5歳児 6月 「ニーハオ！西安のお友達」

ねらい ○ 西安について調べたり、話し合ったりして、文化や生活などに親しみをもつ。

6月に中国・西安市の親子が、交流の為に来園することが決まり、子ども達は友達や保育者、保護者を巻き込みながら自分達で進んで西安のことを調べ始めた。クラスで話し合いの場をもち、保育者が中国の国旗や地図などを子ども達に見せたり、子ども達が調べてきたことを出し合ったりすると「中国語って全部漢字なんだよ」「西安と奈良市って仲良しなんだよ」など、気付いたことや発見したことを嬉しそうに話す姿が見られた。

交流会で歌う「ありがとうの花」をクラスで歌っていると、子ども達がサビの部分で両手を花の形にし、左右に揺らしながら歌っていた。「今のいいね。」と保育者が認めると「ありがとうの花をつかったの」「西安の子は歌がわからないからみんなで踊ったらいいんじゃない？」と、西安の友達に自分達の歌を届けたいという思いで、次々とアイデアを出し、振り付けを考える姿が見られた。

「西安のお友達が来るまであと○日だね」と交流会までカウントダウンをしたり、プレゼントや歓迎の壁面づくりなどの準備をしたりしながら「早く一緒に遊びたいな」と楽しみにする姿があった。



西安のことに興味をもてるよう、絵本や地図、子どもが調べてきたことを目につきやすいところに表示する。

子どもたちが自ら環境にかかわろうとする姿を認める。

(反省・評価)

- ・ 交流会に向けて、中国や西安市のことを自分達で調べたり、国旗や地図を見たりしたことで、子ども達は中国・西安市の文化や生活を知り、いろいろな言葉があることに気付いた。
- ・ 子どもたちが自ら西安のことを調べたり、歌の振り付けを考えたりする姿を認め、他児に知らせたことで自ら環境に関わる姿へと繋がったと考える。



【事例4】《異年齢児とのかかわりの中での育ち》

5歳児 11月 『いらっしやいませ！どんぐりケーキですよ』

- ねらい ○ 年少児に思いやりの気持ちを持ち、かかわり方を考えて遊びを進めようとする。
○ 年長児とのかかわりを通して、憧れの気持ちをもつ。

5歳児が保育室で紙粘土や木の実を使って、どんぐりケーキを作っている。A児が「ケーキ屋さん、園庭でやろうよ。」と友達と一緒にケーキ屋さんを園庭に移し、保育室と同様にケーキを作り始めた。すると、保育者と共に3歳児達が「ケーキ屋さんだって」「ケーキください」とやって来る。すぐ3歳児が来てくれるとは予想していなかった5歳児は「まだ始まっていません」「もうちょっと待って」と慌てている様子で、思うようにつくったものを売ることができずにいた。遊びの後の話し合いでは、「3歳さんが来てくれて嬉しかったけど、つくるのが忙しかった」「どうしよう？」「つくる人と売る人に分かれるのは？」などいろいろな意見が出た。保育者が「いいね。」

保育室から用具を運んですぐ遊べるように場を設定する。

遊び後の話し合いの中で出たことを認め、次の遊びに繋がるように声をかける。

一度やってみようか？」などと声をかけ、後日遊んだ時には役割分担をして遊びが始まった。「ケーキください」と葉っぱを持ってきた3歳児に、「お持ち帰りですか?」「葉っぱのお金でもいいですよ」と、優しく受け入れ、互いに嬉しそうに遊ぶ姿が見られた。その後、3歳児は、買ったケーキをテーブルに大事そうに持って行き、「おいしいね」「もっと食べたいね」と保育者や友達と一緒に美味しそうに食べた。

後日、3歳児は5歳児と同じように「ケーキ作りたい」と保育者に伝え、紙粘土でケーキづくりを楽しむ姿が見られた。

遊びの様子を見守り必要に応じて声をかける。



(反省・評価)

- ・ ケーキ屋さんを3歳児の遊びの場の近くにすることで、3歳児も興味をもって一緒に遊ぶことができた。遊びに使う用具を工夫したり遊びの時間や場を考えたりすることで、異年齢の交流を深めていくことができたのではないかと考える。
- ・ 5歳児は年下の友達をいたわったり気持ちを考えながらかかわったり、3歳児は5歳児の優しさや憧れの気持ちをもち安心して遊ぶ姿が見られた。

5. 研究の成果

- 日々の保育を読み解き、環境構成や援助の在り方を振り返り共有できるように、保育者同士でのカンファレンスを心がけてきた。その中で、子どもがいきいきと心を動かして遊んだり活動したりする姿を捉え、次の保育に繋がられるようにしてきた。
- 3歳児は生活習慣を身に付けていく中で、自分でできるようになった喜びを感じ安心して生活を送ることができた。また、4歳児は保育者や友達と一緒に思いや気付きを出しながら遊びを楽しむ姿が見られた。5歳児においては、相手の気持ちを考えながら自分達で進めていく充実感や達成感を味わうことができた。

6. 今後の課題

- 子どもの実態を共有し、発達に応じた援助や環境構成の工夫についてのカンファレンスを続けていき、保育者が連携し一人一人の子どもの見取りや、いきいき心を動かして遊ぶ子どもの姿に繋がっていきたい。
- 今後も、子ども達が「楽しい」「もっと遊びたい」と心を動かしている瞬間を見逃さず、思いが実現できるよう環境構成の工夫や援助に努めていきたい。